



生徒会は僕専用！
大十ホール？

小説 夜士郎
挿絵 空維深夜

立ち読み版



^{み おん}
エリザ=観音=
エターニア

学園の生徒会副会長。イギリス人と日本人のハーフで、巨乳を気にしている。

^{かい き し め ん}
開基俊

ごく普通の学生として生活していたが、奇妙な病気を発症してしまう。

登場人物紹介

Characters



からくえな
華楽恵那

学園の生徒会書記兼会計。
天才的な頭脳を持っている。



えんじょういん れい こ
円状院玲子

学園の生徒会長であり、
さらに理事長も務める才女。

プロローグ

第一章 そんな病気があるなんて

第二章 男子トイレでドッキドキ

第三章 いじわるな彼女

第四章 水着でドッキドキ！

第五章 廊下で恥ずかしプレイ

第六章 素直な気持ち

第七章 暴走

第八章 えっちな生徒総会

エピローグ

目の前にいる、水着姿のエリザを見たがゆえである。

花見月学園でのプール授業に男女の区別はなかった。女子の水着姿を見て馬鹿騒ぎをするような男子生徒はいないし、見られることを恥じらいながら、見て欲しいと望むような可愛らしいアイドル予備軍の女子も多いからだろう。

そんなクラスでも、やはり、エリザの見目は頭五つは飛び抜けている。

紺色の競泳水着に彩られる、真っ白な肌と金髪が鮮やかだ。豊満に過ぎる乳房は窮屈そうに、艶めく化繊に押し込められて、今にも布地を引き裂いてしまいそうだ。

男子の視線を一身に集めて、彼女は恥ずかしそうに身をよじる。

「うう……嫌な目ですわ、だからプールは嫌いなんですわっ……」

眉をしかめ、頬を赤らめてエリザは、胸を隠すように身体の前で腕を組んだ。そのせいで、むにゅりと潰れた乳房が上下からはみ出しているのがむしろエロいのだが、本人はまるで気が付いていない。

「俊っ。あなたもそんな、胸ばかり見ないで下さいましっ」

「ご、ごめんなさいっ!」

必死で視線を逸らそうとするのだが——すいません、まるで言うことを聞きません。

とはいえ、ツヤツヤの水着がばんっばんに張りつめているその部位から目を逸らすことなど、人間の、否や生物が持つ原初の感情が許さないので。

「んもう。私の胸に注視しない男だと、一度は感心しましたのに……」

ぶつぶつと呟いている。よくわからないが失望されたようだ。

何か、なにかフオローをしなければと俊が焦った、その時である。

おおお、と、どよめきが上がった。

エリザを向いていた男子生徒の視線が一斉に、プールの入り口へ向かう。

不敵な笑みを浮かべて——水着姿の円状院玲子が、そこに現れていた。

長身にびたりと張りつく水着が、彼女のモデル体型をはつきりと描き出している。

形のよい乳房、くびれにくびれた腰は肋骨が一本失われているかのようだ。

それほどに腰は細いのに、お尻の部分は色気たっぷりムッチリと張っていて、正面か

らでも尻房が、左右からはみ出しているのを確認できる。

さらにその長い脚がたまらない。

若々しさに溢れる肌にて形成される股下は座高よりも明らかに長い。しなやかな筋肉と

うっすらとした脂肪に覆われた太股は若々しい肉感に満ちていて、高い位置にある膝小僧

からすらりと伸びるふくらはぎへのラインは流麗の一言につきる。

腰までもあった黒髪は、今はロールアップされていて、そのギャップがまたいい。

「……………」

「……俊。涎をお拭きなさい」

「おうっ」

半眼で睨みつけられて、慌ててごしごし顎先を拭った。

「おおい、二人とも」と、玲子が俊とエリザを認めこちらへ向かってくる。

男子生徒の視線を一身に浴びながら、彼女はまるで臆する様子がない。

まるで、モデルがステージの上を闊歩するかのような、堂々とした歩みである。

「どうしてあなたがココにいますの？ 上級生ですのに」

そばに来た玲子へ、エリザが訊く。

「ああ。今日の授業は二年、三年Bクラスの合同にしたんだ」

「合同に……した？ え？ 勝手に？」

「勝手にとはなんだ、俊。決めるのは、私だぞ」

ふふんと、玲子が笑う。

「……いや、理事長が授業内容に決定権を持つものなのか？」

「で、どうだ俊、私の水着姿は？」

と、彼女は手を当てた片腰をくいつと上げてみせる。

「……いやもう、正直……たまりません」

モデルのようなボーシングの、モデルじみた水着姿が至近距離である。

「……俊。鼻の下が伸びすぎですわよ」

「おおうっ」

「まったく……しよせんはあなたも男ですのねっ」

頬を膨らませるエリザは、なんだか怒っているようだ。何が気に障ったのだろう。

「すまないな、エリザ。男の視線を奪ってしまった」

「そんなもの、いくらでもくれてやりますわ。のしつけてあげますわ」

「ああ、そうか。俊の目を奪ってしまったことに、怒っているのか」

「なanan、何言ってますのっ！ そんなわけないですわっ！」

と彼女は俊の頭蓋を掴んで玲子へ向け思いきりゴキリッ「おごうっ」ねじ曲げた。

「いやらしい男の穢らわしい視線など欠片も必要ありませんわよ。ちよ、ちよちよ、ちよ

つとこいつに褒められたことなんて嬉しくもありませんわっ！ ばかつ、ばーかつ」

「……おーい。俊。生きてるかー」

エリザのセリフを右から左へ聞き流し、玲子はふらつく俊へ声をかける。

「は、はい……なんとか」

「そんなに照れなくてもいいのに。好きなモノは好きと言えばいい」

「だ、だからっ！ そんなんじゃないって言ってますのよっ！」

きいっと叫ぶエリザ——その金髪を、玲子が撫でた。

「ふふ、そうかそうか。相変わらず可愛いなあ、お前は」

「どんだけ上から目線ですのっ！ ああもうっ！」

仲がいい二人だなあと——そんな生温かな視線が、周囲から向けられていた。

長い腕が水中から跳ね上がり、長い脚が水を蹴る。滑らかな背中を水が流れ、彼女のカラダはしなやかに前進する。呼吸をする時ですら、変顔にならないのだ。

クロールで泳ぐ玲子の姿は美しく、優雅ですらあった。

「……すごいなあ、会長は」

「まったく。なんでもできちゃうんですわ。ずるいくらいですわよ」

唇を尖らせて、エリザ。

プールの端にタッチして、玲子が水中から上がる。その美しい身体を水滴が流れ落ちてゆく様は、艶めかしくすらあり、きやあと女子生徒から黄色い声援が上がる。二年男子も、普通ならまず目にするのではない生徒会長の水着姿を脳裏に焼きつけようと眼をかつ開いていた。

「背も高くて。スタイルもよくて。……わたくしも」

ああなりたかったですわ——と、小さな呟きが、聞こえた。
でも。

「……でも僕、エリザのこと、好きだよ」

つるりと。そんなことを言っていた。

「すっ……!？」

ボンッと爆発音が聞こえそうなほど、エリザの顔が赤くなる。

「あ、い、いやそのっ！ 身体、カラダが、エリザさんのカラダが好きなんだっ！」

「いやそれもどうかと思いましてよっ!？」

下心しかないと言ってるようなものである。

「ち、違う、そ、それも違くてっ、あの、そのう……！ あ、あんまりも素敵すぎるんだ。

エリザさんの、カラダ。そのっ、エッチな意味じゃなくもなくもないんだけど……」

「カラっ……！！ げ、下品な言い方をするんじゃないやせんわっ！」

顔を真っ赤にしてエリザが迫る。その胸がド迫力で揺れる揺れる。

「す、好きだなんて。わたくしの、か、カラダなんか……ステキ、だなんて……」

顔を背けて、ぶつぶつと呟いている。と、そこへ水を滴らせながら現れた玲子が、

「なんだ。またいちゃいちゃしているのか」

「いちゃっ……！！ だ、ただだ、誰と誰がですのっ!？」

「そりゃ、副会長とファーストキスの相手がだよ」

「あひゅっ」とエリザが奇妙な吐息を漏らして固まった。

「キス……」 「ああ、そういえば」 「あの二人が……」

これ見よがしな玲子のセリフに反応して周囲から、やっかみを多分に含んだ視線が向けられる。生徒会メンバーの美女二人はともかくとして、それと親しげに見える一般男子生徒としては、胃に穴が空いてしまいそうな視線だ。

「エリザさんと」「あいつが……」「やっぱり、できているのか？」

ざわざわと騒ぐ周囲に、エリザは固まったまま顔を赤くしてゆく。

「もしかして副会長って、けっこうビッチなんじゃあ……」

「ち、ちがうっ……アレは違うんだっ！」

エリザの人格を疑問視するような声が聞こえて、たまらず俊は叫んでいた。

「僕が悪いんだっ、副会長は何もしていないっ！」

「俊……」エリザが、瞳を見開いている。

あの、気の弱そうな彼が。私のために、勇気を振り絞っている——と。

「溺れた時、人工呼吸をするような——あれはそういうものなんだっ！」

「ところでその時のおっぱいの感触は？」

「最高でしたっ！……あ」

玲子の誘導尋問に勢いそのまま叫んで。エリザの脚に、蹴り飛ばされた。

プールの中へ、叩き込まれる。

「ばーか、ですわっ」

と、エリザはのしのしと大股開きで向こうへ行ってしまった。

「……会長」水面にぷかりと浮かび、俊。

「なんだ」

「合同授業にしたのって……エリザさんをからかいたかったからですね？」

「さあな」

俊の問いに、彼女は楽しみに頬を吊り上げるのだった。

授業も終わり、更衣室へ引き上げてゆく。気怠い疲労が、俊の身体を包んでいる。

玲子とエリザも連れあつて、女子更衣室へ向かっていた。

なんとはなし、それを目で追いながら、俊も更衣室へ向かおうとして――。

「ん、くっ……!!」

ドクンッ、と、もはや馴染んですらきた疼きが全身を震わせた、その刹那であった。

「玲子っ!!」

凄まじい速度で玲子が駆け寄ってくる。

俊の腕を掴み、「うわわっ!!」と悲鳴を上げるのも構わず引っ張ってゆく。

「ちよっ、れいっ……んっ」

生徒会長の行動に目を白黒させていたエリザが、眉根を寄せて身を震わせる。それによ

つて彼女にも、俊の発症が認識できたのだろうか、玲子を追う。

消毒室から枝分かれした、奥の部屋――。

「か、かかつ、会長っ!? そこはっ……!」玲子の目指す行き先を知って、俊は叫ぶ。彼女は、女子更衣室へ彼を引きずり込んだのだ。

部屋の造りは男子のそれと同じだ。壁際にロッカーが並び、中央にはベンチが設置されている。違うのは――そこにいるのがみんな、女子だということ。

更衣室の中には何人もの女子生徒がいて。みんな、着替える途中だった。

「会長っ……? きゃあっ!」「いやああっ」「え、ど、どうしてえっ!」
突如更衣室へ現れた男子生徒へと、悲鳴が叩きつけられる。

(う、わわわわわわっ……!)

水着の肩紐をずらしている少女、お腹まで下ろして成長途上のおっぱいが見えちゃっている少女、もはや脱ぎ捨てて全裸になっている少女もいた。むっと塩素の香る室内に、眩しく輝く、青臭い少女の半裸や全裸の身体がいくつも並んでいる。

半分は俊の顔見知りだ。クラスメイトの、生着替えなのだ。

「あんっ……!!」「ふ、ああっ……?」「な、なあに、これえっ……」

と、彼女たちは一斉に身体をくねらせ艶めかしい声を漏らし始める。
「ふむ。これはなんとまあ、キミには絶景だろう」

なんて、思春期な半裸少女たちが発情に侵されていく様を、玲子が楽しげに眺めていた。「れ……玲子っ！　そ、そんな場合では、ありませんっ……でしてよっ」湧き上がる「発情」を抑えつけるような擦れ声で、エリザ。

「ああそうだな。よっ、と」生徒会長はそれに頷いて、俊の身体を部屋の真ん中に設置されてるベンチへと寝かしつけた。

「っ、か、会長……」発症の脈動に全身を責められながら、俊は呻く。

「さあ。今から——生徒会の仕事を始めようか」

玲子が笑い——ベンチに跨るようにして、俊の腰上に立ち上がった。

キャップを脱いで、ロールアップの髪を解く。

濡れた黒髪が、落ちる。水滴が、きらきらと輝きながら、俊の下半身へ降り注いだ。

真下から見上げる競泳水着の円状院玲子——脚の長い彼女であるがゆえに、ハの字に開いた太股と、その付け根までがはつきりと覗けてしまう。流麗な肢体から流れ落ちるプールの水が、ぼた、ぼたと、彼女の股間部分から、俊の股間へ滴り落ちる。

まるで、猛る怒張を冷やそうとでもするかのよう。

濡れ色の紺が玲子の肢体にクッキリと張りついている。身体の凹凸が、下からならなおさらはつきりと見えて、たまらないほどに肉感的だ。

「ふふ。股間がビクビクしてるぞ」

玲子の直接的なセリフに女子生徒たちがびくりつと身体を震わせた。そんな周囲へニヤニヤと、愉しむような視線を向けて、彼女は俊の水着を腰下まで下ろす。

びいんっ！ と元氣よく立ち上がる肉棒。「きゃっ」と少女らが悲鳴を上げる。

「さて、じゃあ可愛い生徒たちを守るために、チンポをどうにかしてあげよう」と、玲子は膝を曲げ——その股ぐらを、俊のペニスへ押しつけた。

「っ、うああっ……！！」

濡れた化繊の感触が、ざらりと海綿体を撫でて——思わず呻いていた。

玲子は両手をベンチの上、俊の両脇へ置くと、ぐいぐいと尻を押してくる。むちいとド迫力の肉尻が、海綿体にのしかかり、俊の下腹にぺたりと倒される。

そうして——水着尻が前後へ動き始めたのだ。

「んっ、くおおう！」

裏筋がずりずりと、濡れた水着に擦り上げられて俊の腰がびくついた。

「ふふっ。あつい、熱いぞ。キミのチンポ。冷えた身体にちょうどいい」

玲子の赤めく唇が、淫らな笑みを浮かべていた。

周囲の女子生徒たちからは「発情」が引いたようで、所在なさげに立ち尽くしている。生徒会長の決めたルールに従わなければならず、けれど気になって仕方がない——という



感じだ。着替える手も止めて、こちらを見ようと、あるいは見まいとしている。

ベンチの上で素股——ならぬ水着股コキプレイを行う二人の姿を。

水着をパンパンに張りつめさせた尻肉が、蠢きながら前へ後ろへと移動する。

じゅむつ、じゅむつと濡れ音を混じらせて、布一枚隔てた向こうにある秘肉がペニスを愛撫する。水着は股間に食い込んで、少女の花唇をきゅっきゅと締め上げる。

「んっ……くふっ……あっ……熱い、チンポが、マ○コに食い込むっ……！」

黒髪を揺らす玲子が熱い息を吐く。股間を刺激され、彼女も感じているようだ。

長い脚が時折びくんと震えて、その表面にぼつぼつと、玉の汗が吹き出していく。お椀型の乳房をふるふると揺らしながら、美貌の生徒会長は股コキプレイに没頭していく。

「うわわっ……玲子、いやらしいですわあっ……」

エリザが真っ赤な顔をして、二人を眺めている。股間が、もどかしげに震えている。

「ど……うだ、俊君。……ふあ、んっ……気持ち、いいかい？」

「は、いいっ……いいですっ、くっ、うううっ！」

濡れた水着に擦られるのが、こんなにいいとは。ほんの水着一枚向こうに、女の子の大事な——マ○コがあるのだ。そんなところでコスコスと、チンポを撫でられているのだ。

「ふふっ……」と玲子が身体を起こす。俊の膝のあたりに手を置いて背中をぐつと反らせると、尻谷が股間に密着してむにゅりと肉根を挟み込んだ。

「ふああああ！」

「いゝい声だ。ふふっ」

はちきれんばかりの桃肉に、ぎゅむううとチンポが圧迫される。そのまま彼女が腰を動かせば、ズリズリとチンポを尻ズリされて腰の戦慄わななくような快感に襲われる。

プールの水が潤滑液となつて、化繊が海綿体を滑りゆく。

黒髪が妖しく揺れて、背骨が蛇のようにくねる。

蜂のようにくびれた腰から、驚くほどに膨れ上がる尻肉球。その存在感は圧倒的だ。

「私の……尻が、そんなにいいのか、んっ……俊君？」

「ううっ！ くうっ……いい、かいちょうの、おしりいっ……よすぎ、ですっ……！」

エリザのふくよかなパイズリともまた違う、その内部に張りつめた大臀筋を感じさせる弾力たつぷりの尻ズリである。ポリウムに溢れ、それでいて芯がある。そんなゴムボールのような肉球に、海綿体は強烈に擦過されビリビリと痺れ上がる。

「おしりでっ……ふふ、水着でチンポしごかれて気持ちよくなっているんだなっ……！」

細腰がうねうねといやらしくくねり、男根を気持ちよくへし曲げる。

そうしながらまた、ぐうっと全体重をかけて尻でチンポを包むのがたまらない。

「ああっ……」

「はは、女みたいな声だぞ、俊君っ……んっ、くっ……！」

——挿入したい。

少女自身の自慰により、充血しきつたその濡れ孔へチンポを突っこみたい。でも、今は——発症もしていない。つまりこれは、ただの肉欲だ。

性欲の赴くままに授業中にクラスメイトの只中で女の子とセックスするだなんて——。

「俊……俊。せ、せつないんですの……ここ、とつても疼くんですのお……」

エリザのヒップが、オマ○コがクネクネして。

「はやくわたくしの発情を止めてっ……わたしのオマ○コに、発症チンポをズボズボ出し入れして、白いお毒をどびゅどびゅ注ぎ込みなさいっ……!」

砂糖と蜂蜜を生クリームでデコレーションしたような声と一緒に、おねだりしてきた。

ああ、もう、そんなの——我慢できるわけがないじゃないか。

エリザの尻尻をむにゅりと掴み、左右に割り開き、肉根を肉花に添えて。

——ずぶううっ!

「んっ、——ひっ、くひいっ……!」

腰を突き出す。贅肉の中心点、秘密の小部屋に通じる狭苦しい肉道へ亀頭が滑り込む。そこは初めての男を悦び迎え入れようと、自ら緩み、呑み込もうとしていた。

「な、かにっ……俊のが、きましたわっ……あ、あ、お、おおきいっ……!」

細い背中が山なりに持ち上がる。肉根から尻を逃がそうと、身体が反応しているのだ。

「エリザっ……えりざあっ」

それを逃がすまいと俊は少女の腰をガッチリ掴んで男の象徴を押し込んでいく。

「んぐうううっ……こ、んなに……あつくて、かたいのおっ……あああっ！」

細腰が震え、机がカタカタと音を立てる。漏れ出る悦悲鳴と絡みあい、教室に響く。

「……で、では、山口君。三ページ目を朗読して……」

「……………ゴクリっ」

「山口君っ」

「あ、は、はいっ！」

と、教師はなんとか授業を続けようとするけれど、生徒たちは皆、気もそぞろだ。

（教室でっ……みんながいる、教室のなかでっ……!）

エリザの——処女を奪っている。

我慢汁を少女の内部に擦りつけながら、鈴口がミチミチと肉壁を断ち割っていく。

「ふああ、あ、俊の、俊のおっ……アソコにい、オマ○コの奥にきますわあっ……」

俊の手の平が食い込んだ、尻たぶは汗まみれだ。うなじは真っ赤に染まって、ツインテールがふるふると、彼女の苦痛を表すメーターがごとく揺れている。

「うんっ、僕の、僕のチンポがエリザのオマ○コに埋まってるよっ……みんながいるのに、そこでっ……エリザ、処女じゃなくなっちゃうよっ！」

「はあっんっ、ん、ああ、みんなあ……クラスメイトみんな、ああ知ってしまったのねっ……！ わたくしがオマ○コに、チンポを入れたことがあるとっ……ああ……」

潤みきり、涙の滲む青い瞳が周囲を見回す。それを受けてそそくさと、視線を逸らす生徒たち——見られていることを強く自覚して、エリザの全身がかあつと発熱する。

みちりっ……にちみちっ……ぶちっ！

「あ、……や、やぶれっ……」

最奥への道を塞ぐ肉の門を引き裂けば後は一直線。俊のペニスが根本まで、ぐちゅるっ！と埋まってしまった。その瞬間、エリザの身体がビクビクっ！と痙攣し。

「ひっ、くひいっ、クル、ふああい、イクううっ……!!」

その美貌が蕩けて落ちて落ちる。つりとお尻の孔がキュッキュとひくつき、テールを跳ね上げ、破瓜を迎えた少女は最初の一突きで肉悦の絶頂に見舞われたのだった。

「うわあ、アソコのなか、ぐねぐねって……い、イッチやっただね、エリザっ……」

「ああ……わ、わたくしいっ……こんな、処女なのに、い、いれてすぐにイッてしまうなんてっ……なんて、なんてはしたくないんですのおっ……」

と、机に顔を伏せてしまう。けれど、ずちゅるっ……と俊がわずかに腰を引くと。

「んふうっ、ふあああ……！ ああ、なか、こしゅれますわあっ……！」

とたん顔を跳ね上げて、甘ったるい声を放つのである。

「はしたなくなってるよ——これは、僕の病気のせいなんだから」

「ああ、そ、そうですわよねっ……これは、病気のせい、びょうきの、せいですわっ……」

「——それに、初めてでこんなに気持ちよくなってくれるなんて、とっても嬉しいよ」

「俊……」

精一杯に首を捻り、こちらを見返すエリザの顔も嬉しそう。自分の性器を受け入れてくれる女の子の顔は——なんだか、とてつもなく可愛らしく見えた。

少女の胸前に手を伸ばし、ボタンを外してインナーとブラジャーを一緒に捲り上げる。肉感たっぷりの乳房が、机の上にタプンと垂れた。

形よく大きなそれをむにゆりと握りしめて包み込み、ぐにぐにと揉み上げた。

「んんんっ、お、おっぱいいい……俊、わ、わたくしのおっぱい……好き？」

「うんっ……こんなに綺麗で、気持ちよくて……触ってるだけでどうにかなりそうです手に余るほどの質量である。それをモミモミしながら、俊は腰を揺り動かす。

「ああっ、う、嬉しい、ですわっ……嫌いだったのに……あなたに触れられるのは……」

「でも……おっぱいだけじゃないっ……せんぶ、エリザのせんぶが好きだよっ……！」
脳の中に吹き荒れる、情欲のままに——俊はそう叫んでいた。

告白である。クラス的全員に、教師にすら聞かれながらである。

どこからかヒュウと口笛が鳴った。

「ああつ……俊、そう言ってくれるあなたがっ……わたくしも、わたくしもおっ……」

吸り泣くようなエリザの声。その尻に、肉棒をずぶりと撃ち込めば、「ふにゃあ」と愛らしい嬌声が教室に響き渡る。内壁を引きずるようにしてずりずりと引き出せば、

「ひいんひいん」とツインテールを振り乱し、しなやかな身体を震わせるのだ。

「すごい……」「エリザさん、あんなカワイイ声出すんだ」「気持ちよさそう……」

ひそひそと、皆が顔を寄せあっている。

もう授業にはならないかと、教師は諦め顔だ。

けれど等の少女に、そんな注目を浴びまくっている自覚はない。

「あつ、ああつ、感じますのおつ、俊のチンポでかんじちゃいますのおつ……！」

唄うような悦声を、周囲に駄々漏らしで身を振る。その秘奥は、もうぐちゃぐちゃだ。

「はじめてのっ……はじめてのマ○コおつ、俊にほぐされていきますわっ……」

たっぷりの涎にまみれた肉壁は、前後の抽送を滑らかなものにしていた。

熱い肉棒を噛みしだく肉唇が表側にむちゃあつと剥け上がり、少女の背中が振れて跳ねる。破瓜を迎えたばかりだというのに、その身体は完全に、男のそれを受け入れていた。

「すごい……こんなにエッチなんだ。エリザ……ここ、教室だよ？ 教室でっ……、くっ、

チンポをずっぽり呑み込んで、こんなに気持ちよくなるなんてっ……！」

「あ、あなたの！ あなたの、病気がっ……！ ふああ、わたくしを、こんなっ、淫らな

女にしていますのよっ……！ 教室でチンポを呑み込んで、気持ちよくなってしまうようなはしたないオマ○コにしてみましたのよっ！ ん、ひいああズボッてえっ！」

いやらしい、彼女の声に誘われるように、俊は肉棒を押し込む。

「うわ、なか、でギユウって締めてきたっ……！ ほんとにはしたないマ○コだっ……！
「いやああんっ……」

桃色も綺麗なお尻の孔が、キユウつと恥辱に窄まった。

俊の視線に晒されて、括約筋が恥ずかしそうに身を振る。ペニスを取り巻く肉壁が強烈に海綿体を圧迫して、グネグネと蹂躪する。腰の奥まで突き抜けるような初物ヴァギナの締めつけに俊はぐう、と呻いた。射精への欲求が、脳内に溢れ出す。

「もうっ、僕もイキそうだっ……！ 教室で、エリザの中に出しちゃうよっ……！」

「い、いいですわよっ……わたくしの中に精液をっ……ふああ、排泄してっ……はやく、病気を、収めなさいっ……！ あふうう、んふううんっ！」

教室で、制服姿の少女を立ちバックで責め立てている。

日常的に授業を受けるこの場所で、美少女とセックス！ その情景はなんともいえない興奮を駆り立てて、俊の腰はますます攻撃性を増していく。

ずっちゅ！ ぐちゅ！ にちゅる！ ぶちゅ、ぐちゅん！

「んひいっ！ 処女、しよじよマ○コが、使われてますわあっ！ あなたの性処理に、

好きなように使い回されてっ……！ んぐううっ、あーっ！」

ペニスはずつちゅと内部を穿るたびミニスカートの捲り上がった桃色ヒップがひくと震えて肛門がクパクパ開閉を繰り返す。がたん、がたん地震える机、握っているのにたつぷたつぷと揺れる余りおっぱい。それらが彼女に襲いかかる肉悦の激しさを物語っていて、教室の中に満ちる淫靡な空気をなお色濃いものにしていく。

「きもちいいっんですのおっ、おっぱいモミモミされながらマ○コずぶずぶしゃれるのおっ、あたまが、おかひくなっちゃいそうですのおっ！ はやくううっ！ 俊の、俊のザーメンどびゅどびゅだひてっ！ このきもちいいのからっ……かいほうひてええっ……！」

どれほどの肉悦に襲われているのか——エリザは呂律すら回らなくなっている。

チンポを押し進めるたびに、お尻の孔が蠢くのがたまらなくエロテックである。膣孔は肉竿を離すまいとキュウキュウひくついて、おっぱいは手の平を焼くほどに熱い。

冷然であった美貌をドロドロに蕩かして真つ白だった肌を赤らめてチンポを求めるように腰をうねらせる、エリザ観音エターニア。

(こんなのっ……もうっ！)

みんなの憧れを、みんなのいるところで犯している。

そう思うだけで、射精欲が腰奥にどんどんと溜まっていく。

「あっ、ああっ、イクっ、わたくしいっ、みんなのまえでっ、チンポずぶずぶしゃれてっ！

しゅん、しゅん！ もう、もうううつわたくしいい……！」

官能に喘ぐ媚体が震えて、ツインテールが、乳房がぶるぶるつと波打った。

「つくつ、イクんだね、エリザッ！ 僕も、僕もおつ……！」

でるっ、でるでるでるっ……！！

「はやくっ、はやくうっ、ザーメン、じゃーめんひようだいでゆのっおおっ……！」

可愛らしいザーメンおねだりが教室に響く。俊の腰がびくんと跳ねて。

「くああっ……！」

——ドビュビュビュ！

「はひいっ……!？」

ビュルビュルビュルウ！ ドビュルツ！ どびゆるびゆる、どびゅう！

「くひい、ひいあああつ、きまひたわあつ、しゅんの、しゅんのザーメンっ、くちやいザー

ーメンがオマ○コに流し込まれてますわああつ！」

エリザの細頸が天を向く。瞳を見開き、歓喜に口腔を緩ませて。膣肉にざあざあと流れ

込む肉汁を肉壁のすみずみまで味わいながら——。

「オマ○コおっ、ザーめんどくどくう、イク、ん、イッてしましますうう……」

天井を突き上げるような悦声とともに尻が跳ね背中が反り上がった。汗まみれの両脚が

びいんと伸びきって爪先立ちになる。跳ね上がるツインテールは羽根に似て。

その姿はまるで、天上に飛び去っていく天使のよう。

「くっ、うう……エリザあ……」

どびゆるどびゆと最後の一滴までを、アイラヴ天使の膣内へ注ぎ込む。

「ん……オマ○コ、あひゆいのお……どびゆどびゆ、でてまひゆわう……」

ヒクつくヴァギナから男根を引き抜く。「んはあつ」ガクガクガクとエリザの両脚が震えて、かくりと脱力する。上半身が机に落ちて、両脚が蛙のようにはしたなく開いた。

「は……あ……はあつ……はあつ……」エリザの椅子に、腰を落とす。

目の前には突かれまくった彼女のオマ○コ。

彼女の女芯は淫猥に口を開いたままだ。そこからどろお……と精液が溢れ出し、教室の床を汚してゆく。そのヴァギナは清純であったころよりも赤色を濃くして、花弁を濡らす白濁液とのコントラストが異様なまでに生々しかった。

「しゅ……しゅん。びようき……おさまり、ましたの……？」

「う……うん」

「そう。それは——よかったですわ……」

振り返り、嬉しそうに微笑むエリザ。

そんな彼女に、実は発症なんてしていなかった——とはとても言えぬ俊だった。



「チンコのっ……！ 上から下まで……せんぶ気持ちいいっ。エリザの、おっぱいすごいよおっ……ヌレヌレで、ぐちゅぐちゅで……オマ○コみたいだあっ」

得意げな美貌の下にある肉塊は、もはやチンポを悦ばせるためだけの性器だ。

「ふふっ。嬉しいですわ……。んっ、あ、あなたがおっぱいで感じてくれること……ああ、これほどにおっぱいが大きくてよかったと思っただけのことではありませんわあ。俊のいやらしいチンポ、わたしの、お、おっぱいマ○コで射精させてあげますわっ……」

なおも激しく胸を揺すり立てながら、エリザが嬉しそうに微笑んだ。

「むっ。お兄ちゃんは、私に苛められてイクの。そんな駄肉のおかげじゃないの」
抗議するような恵那の声。

彼女はなおも強く俊の尻に顔を押しつけて、その内部を思いきり舐めて穿る。

「んほおおお！ ふおおお、ふひいーっ」

足指がビクビクと引き攣れる、それほどの悦感が括約筋を撫で回していく。

「らっ……おひり、らめえっ、えにやああっ」

「ふん。お兄ちゃんなんて、情けなくコーモンで気持ちよくなるのがお似合いなの。じゅるうろう、にちゆるっ、れるちゆるるう。れろれろりんっ！」

「おこおおお、ほおおお、うほおおお」

ケツ孔を舐められまくって、なんだかもうジャングルの猿みたいな声しか出てこない。

快感に翻弄されるまま、俊は玲子の尻をがとと掴んでメチャクチャに舐め回した。にちゆるじゆるっ！ ねじゆるれるっ！ れるれるれるっ！

「あふううっ、ああっうっ！ あああっ、はげしっ、オマ○コ溶けるううっ……！」
さらにヴァギナの頂点にてしこり立つクリトリスを舌先でネロネロと責め立てれば――、
「ああ、あああっ、あううあ！ そこ、かんじすぎるっ！ くひいいいー！」

凜とした生徒会長は黒髪を振り乱し、耳を覆いたくなるような嬌声を垂れ流す。
――もう。

身体のでっぺんから下半身まで女の子まみれだ。

（みんなの……女の子の味、匂い、感触……ぜんぶ、きもちいいっ……）
生徒会室で生徒会女子の肉体に包まれて、情動はもはや限界を超えて煮えたぎり。
ぐっぐつとしたその熱量が、出口を求めようとこみ上げる。

「ううっ……あううっ、ひぐうううっ！ エリザあああっ……！」

「ええ、わかりますわっ、あなたのチンポがおっっぱいマ○コの中でビクビクしてますわっ！ 出しますのね、出しちゃいますのねっ……んっ、ふっ、ふううっ、ふああっ」
ぷるんっ、ぱっちゅ！ ぱっちゅん、ぷるるっ、ぶちゅるっ！

水たまりにゴムボールを落としたような音が何度も何度も股間に響く。

金髪生徒会副会長の激しい乳搾り――しかし搾られるのは乳でなく男根だ。

「あつ、でつ、ででつでででつ……！」

「お尻がきゅつとしてるの。括約筋が射精反応を始めているの……レロロロッ」

トドメを刺すように、恵那の舌肉が肛門にズゾゾと潜り込んだ。直腸に溢れる舌悦が、ペニスの裏側にぞわりとした快感を流し込んで――。

「くうううう！ でる、でるううううう！」

俊の腰がぐくぐくと跳ね上がって。

どびゆるっ、どびゅどびゆるうっ、どびゅびゅううう！

熱い飛沫を――乳袋の中にしこたま吐き出していた。

「あはっ、あははっ！ おっぱいマ○コのなかに、いっぱい出てますわあ……」

乳房をぎゅうぎゅうと押しつけあいながら、嬉しそうにエリザが笑う。

「くおっ、んじゅぶううう……！ じゅびゆるゆうう！」

脳天まで突き抜けるような射精悦に俊の舌がジタバタと暴れて。

「んああつ、私も、イク……くうう、イクっ……！」

玲子の綺麗な長脚が、ぶるるっ、ぶるるつと小刻みに震えた。美貌を陶酔の色に染めて、黒髪が、気持ちよさそうに揺れ動いている。

「ま、まだ出ていますの……ああ、熱いですわあ……わたくしのおっぱいま○こに、いっぱい中だしですわあ……おっぱいが妊娠しちゃいますわあ……！」

どびゆりゆ、どびゆりゆる……。乳塊を存分にザーメンタンクにされて、エリザは淫らに顔を緩ませる。ひとしきり射精が終わり、俊ががくりと脱力すると。

「こんなに……出しましたのね」

エリザは乳房を——くぱあ、と開いた。どろりと粘つく肉汁が、左右に白濁の橋を描き、たちまちに濃密な精臭が三人のまわりに立ち込める。

彼女はうつとりとザー汁まみれの乳房を口元まで持ち上げてぺろりと舐めて。

「ふああつ……」と悩ましげに全身を震わせた。

「……お兄ちゃん。エリザだけずるい」

「うむ。まだ射精せるのだから射精せるのだよな」

と、玲子と恵那がエリザを押し退けてチンポのそばにしゃがみこむ。

エリザ一人が射精を受けたことに、対抗心を抱いてしまったようだ。

「す、少しだけ休ませてっ……あああつ」

懇願する俊になど構わずに、恵那の舌が肉鞘を這い玲子の口腔が亀頭を捉える。

「んっ……精液、おいひっ……ちゆるっ、にちゆるっ……」

「お兄ちゃんの……くちやい、ザーメンキャンディー……ぺろ、んれろっ……」

苦々しい白濁のまぶされた肉棒も今の彼女らにとっては甘露な飴のようだ。

口の端に笑みを形作る玲子、無表情なまま、頬が紅葉のように赤くなる恵那、二人の舌

が執拗に、ペニスにへばりついたザー汁を舐め取っていく。

「ああつ、わ、わたくしもつ……！」

と、乳袋に溜まった精液を味わっていたエリザが食欲に、玲子の隣に顔を突っこんだ。舌を伸ばしてチロチロと、美味しそうに肉棒を味わい始める。

「んむうつ……エリザはさつき精液出したのつ……じゃまなのつ」

「そうだぞ、じゆるつ、んじゅつるつ。ちよつとは遠慮を……しろつ」

「んれろお、れろおつ。い、イヤですわつ！ 一人は精液が欲しいだけでしよう？ わ、わたくしは俊をいっっぱい悦ばせたいんですのよつ」

一本のペニスを巡り、三人の少女が押しあいへしあいである。

「うわあああつ、なんだこれえつ、くうう、うああつ……！」

恵那が左手に幹を舐め、エリザが右手に幹を舐め、玲子がてっぺんで吸い上げる。三つの美貌が肉根にくっついて、いつ果てるともない舌奉仕。

亀頭も肉鞘も裏筋も、陰囊にいたるまで生徒会女子の供物であった。

じゆるるつ……くちゆるるつ！ ねれろつ……ああ、俊……！ くうちゆ、ちゆう、ちゆばつ……もちゆるりつ……ちゆうちゆう……ねろれろつ……おにいちやあん……ちゆ、べちゆるるつ……れるちゆるるつ、ちゆ、ちゆうう……ふふ、俊君つ……ずちゆる、れろ……。

「くあうあつううあうあうあうあうあうあう！ き、きぎききき、きもちよすぎるううつ…… たつ、たまらないよおおつ……！」

悲鳴は鳴き声混じりであった。頭の中が狂ってしまったいそうなくらいに溢れる多幸福感、快楽のドーパミンがドロドロと脳髓を汚染していく。膝がガクガクするのを止められない。三人娘のチンポしゃぶりによる快感で、人格すら消失しそうだ。

「俊の……チンポ……あつい……かたひい……」

「犬みたいにつ……嬉しそうに、お兄ちゃん……」

「美味しいっ……チンポの味で、舌が肥えてしまうっ……」

ざらりとしてネットネットとした三枚舌がグロテスクな逸物を這いずり回り、俊の腹奥から再びの生汁を吸い上げようと熱心に絡み蠢き踊る。

イヤイヤと女の子みたいに首を振っても、少女たちの苛烈な舌拷問は止まってくれずに爆発じみた悦楽が下腹にくあつと広がって。

「ううぐつ、くううう！ ああまたつ、またつ、僕、出る、出るうううつ！」

熱いモノが尿道を駆け上がり、ジタバタと腰を震わせた。切ないほどの快感を、放出するのをもったいなくて、恵那の唾液にまみれた肛門をぎゅうと締め上げ我慢しても――。

「はやく、俊ン」

「我慢なんていらなの」

「もうイッてしまえ……」

妖しく言の葉を紡ぐ三人の舌が、ねじゆる！ と強くペニスを舐め上げて。

「——！！ ううううつ……あ、くあ……ああああああ！」

どびゆるっ……！！

びゆるびゆるううっ！ びゆるばりゆるっ！ びゆる、びゆるっううるうううううう！

さながら間欠泉がごとく、白濁の熱汁が鈴口から噴出する。気持ちいい、気持ちいい。気持ちいいのが——止まらない。脳みそが全部チンポの先から出ていくような、凄まじい快感の嵐に俊はただ「ううああ、うああ」と叫びた。

びゅっ、びゆるううう！ びゆる！ どびゅどびゅどびゅ！

噴出口に顔を近づけていた玲子に、びちゃびちゃと白濁が叩きつけられる。

「ああ、熱いつ、くさいのがああ……！ ふああ、ああっ！」

やむことなく噴き出し続けるそれを顔面に浴びて、美貌が艶めかしく溶けて崩れる。ザーメン噴水を顔面で受け止めながら、彼女は喜悦に肢体を震わせた。

「俊の、しゅんのじゃーめんっ！ ああ、またきましたわあっ……！！」

「キタナイ……キタナイ、キタナイのが、顔に……いっばい、んっ……！！」

さらに玲子の顔で跳ね返った肉汁は、精液シャワーとなってエリザと恵那に降り注ぐ。



鼻も、唇も、頬も瞼も睫まで、学園で評判の可愛い顔が、欲望の汚濁にまみれていく。ドロドロとした泥汁が、三人の顔にぐちよりとへばりついて。

けれど皆、とても嬉しそうだ。

「ふああ……顔が、重いですわあ……」

少女らはしたなく舌を突き出して、口のまわりについた精液をネロネロペチヨペチヨ舐め取っていく。口中にまで迎え入れ、モグモグと味わうのだ。

「ンチュ、クチュ……ああ、俊のあじい……んん、なんだか、わたくひいつ……」

「お兄ちゃんのキタナイのお……おいしくてっ……」

「またっ……またっ……コッテリザーメン浴びて、イってまう……!」

三人の顔が蕩けたかと思うと、その身体が小刻みに震え始める。

腰がカクンと跳ね上がり、一瞬、その動きが止まって——がくりと脱力した。

「はあっ、はあああっ……はあああああっ……!」

エクスタシーに見舞われた、三人娘は互いに抱きあうようにしている。精液にまみれた面貌を寄せあい、力なく頹れてただ生ぬるい吐息を繰り返していた。

(き……もち、よかった……)

俊もまた、息が絶え絶えだ。

「す……凄かった……死ぬかと思ったっ……! み、みんな……大丈夫?」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※主人公の活躍は、美満の方に入ってます。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!